

ロシア語の進化傾向

井 柝 貞 敏

ロシア語は東スラヴ語をなし、西スラヴ語(ポーランド語・チェック語など)、南スラヴ語(ブルガリヤ語・セルボクロアート語・スロヴェニア語など)と共に、共通の基礎語たる原始スラヴ語(スラヴ基語)を継承する言語すなわちスラヴ語派に属する。スラヴ語はヒッタイト語・ギリシャ語・インドイラン語・イタリック語・ゲルマン語・バルト語等々の語派とともに、共通の基礎語たる原始インドヨーロッパ語(印欧基語)を継承するものである。

スラヴ語派はバルト語派(リトアニア語、ラトヴィア語、古代プロシヤ語)と最も近く、両者が一つの語派をなすか否かが昔から議論されて来たが、印欧語の共通期の後にバルト語・スラヴ語を含む方言地域があつて、全く等質ではなかったにせよ、多くの共通の改新をなし得た時期があつたことは確かであろう。

本編ではロシア語の歴史を概観しつつ、ロシア語がどういう進化傾向を有して来たかを考えて見たい。

*

古代教会スラヴ語(南スラヴ語を基礎とする宗教語・文化語)および古代ロシア語には次の子音があつた。閉鎖音——唇音 p, b, 歯音 t, d, 後舌音 k, g, 摩擦音 f, v, x, s, z; š, ž, 閉擦音 c, dz (古代ロシア語には実証されない), č, 鼻音 m, n, 流音 r, l, sonant j (始めは j のほか š, ž, č, c, dz は軟音で, k, g, x は硬音だった。他の子音は次に後列母音が来れば硬音, 前列母音が来れば軟音だった, n, l, r は軟音のほか口蓋化音ももっていた) 印欧基語との対応は次のようである。

印欧基語	スラヴ語	印欧基語	スラヴ語
*p, *ph	p	*k ^w	k
*b, *bh	b	*g ^w , g ^w h	g
*t, *th	t	*k	s
*d, *dh	d	*g, *gh	z
*s	s	方言的 ś	x
*z	z		

f はスラヴ語には始め存せず, vse ‘すべての’ のような位置に来た時や xv などから生じ, また外来語から来た。v は *w (子音的 u) から出た。印欧基語の *n, *n̥, *r, *l はそのまま保たれた。印欧基語の *y (子音的 i) はスラヴ語では語や音節の始めでは j となっており, ロシヤ語では後に ѣ と記された。また母音を印欧基語のそれと対応させて示せば次のようである。

印欧基語	スラヴ語	印欧基語	スラヴ語
*a } (バルト語 a)	o	*ai }	ě
*o }		*oi }	
*e	e	*ei	i
*i	ĩ	*au }	u
*u	ũ	*ou }	
*ā (バルト ā, リトア o) }	a	*eu	ju
*ō (バルト ō, リトア uo) }		*on }	o ⁿ (鼻母音)
*ē	ě	*om }	
*ī	i	*en }	e ⁿ (鼻母音)
*ū	y(ы)	*e.n }	
*r	古代ロシヤ ĭr	*or	教ス ra 古ロ oro
*l	古代ロシヤ ŭl	*ol	／ la olo
*n }	e ⁿ	*er	／ rě ere
*m }		*el	／ le olo

ě はヤッチという字で書かれた音で, スラヴ基語では *ea のような開いた音だったらしいが, 古代ロシヤ語では i と e の中間のような音だったらしい。

さて印欧基語は子音として豊富な閉鎖音と s 類音をもっていたわけだが, スラヴ語はこれらを多少変えたにせよ語頭でも母音間でもよく保ったので, 子音が語の骨格をなすゆえ, 語の相貌は変らなかった。例インドイラン語派のサンスクリットの三人称単数 pácati ‘彼が焼く’ に対し, 教ス pečetū, サンスクリットの位格複数 sūnūṣu ‘息子たちにおいて’ に対し, 教ス synūxū など。印欧基語からスラヴ基語まで音節の数と順序はほとんど変らなかったのも, 語形や文法形は昔のまま明瞭である。

もちろん子音はかなり変化した。ĩ, i, e, ě, eⁿ の前の k, g, x はそれぞれ č, dz (更に š), š となった (第一次口蓋音化)。その後東スラヴ語では *ai, *oi から出た e, i の前の k, g, x は c', dz' (後に z'), s' となり, 前列母音前の

kv, gv は cv, dzv (zv) となった(第二次口蓋音化)。無気と有気の2類の閉鎖音が無気の一類に帰し、例えば dh と d がともに d となった。このために例えば *dō ‘与える’ と *dhē ‘置く’ からの教ス da-, dē-, ρ да-, де- は母音の相違だけになってしまった。また印欧基語になかった後舌摩擦音 x が発生した。それゆえスラヴ語の子音組織は印欧基語のそれと非常にちがう。しかし閉鎖音はそのまま保たれ、母音間の子音は消えも弱りもしなかった。他の印欧語ではよく有声化したり消えたりする s さえ母音間で有声化したり h になったりしなかった。子音は明瞭で、各音節を他の全音節と明瞭に区別し続けた。そこで音韻組織の骨組は元通りで、‘印欧基語’の話し手もスラヴ語の語を理解するかと思われるほどである、nebo ‘天’は印欧基語 *nébhos ‘雲, 天’とそっくりで、サンスクリット nábhaḥ, 古代ギリシャ語 néphos のほうが分りにくいほどである。

母音はかなり変ったが基礎語の主要な特徴は保った。スラヴ語は ě と ě, ā と ō を混同してそれぞれ o, a にしたが、印欧語では a は普通 o と交替を行わないため不便はほとんどなかった。しかし重大な結果を来した変化がある。まず後列母音が口蓋の中央で、かつあまり唇を使わずに発音されるようになったことである。このために ū は y となり、短 u は固有の音色を失って先行子音を軟化しない点しか i とちがわなくなった。そして全母音が、硬子音の次に立つ硬母音と軟子音の次に立つ軟母音に分れた。

硬母音	a	o	ŭ	y
軟母音	ě	e	ĩ	i

また母音短化の傾向も重大な結果を来した。多くのスラヴ語で長音が大きく失われ、ロシア語では長音が全く保たれない。古い短音の i, ŭ は最も閉じていたので全母音中最も短くなり、極短となって固有の音色を失い、位置に応じて消えるか別の音(ロシア語では i > e, ŭ > o, セルボクロアート語では a, チェック語, ポーランド語では e)になるかした, 例 сънъ, 生 съна > сон, 生 сна ‘眠り, 夢’。これが形態上にも多くの変化をひき起した, 例えば男性名詞で сон, сна, сну……のような語形変化が規則化された。

また後続音節の初頭子音に先行する閉鎖要素を除く傾向が生じた(バルト語派にはこの傾向は生じなかった), このためにスラヴ基語には開音節しかなくなり, 音節内で聞えが漸増する傾向が生じた。そこで例えば後続音節の n の前で p が消えたために, *supnos (ギリシャ語 hýpnos, リトアニア語 sāpnas) は教ス sūnũ ‘眠り’となった。この種の子音の消失は多くの形を不明瞭にし

た。例えば教ス *sǔnǔ* ‘眠り’ と *sǔpati* ‘眠る’, ロシヤ語 сон と спать との関係は一見明瞭とはいかない。その後, 別の音変化などの結果閉音節も生じたが, 今も開音節の傾向は失せない, 英語 rot はロットと響くのにロシヤ語の pot はロートと響くのはこのためである。

すべての二重母音は短化し, 別音になってしまった。n, m に終る二重母音は鼻母音になったが, スラヴ語では鼻母音は不安定で, ロシヤ語では11世紀からすでに o, e の鼻母音が u, ja と混同されている。リトアニア語 rankà ‘手’ に対し教ス roⁿka, ロ pyká。r, l に終る二重母音は子音間と語頭において各スラヴ語に相違がある, 南スラヴ語とロシヤ語では上の表のように変った。リトアニア語 vartýti ‘回す’ (ラテン vertō ‘我回す’, サンスリット vártati ‘彼回す’) に対し教ス vratiti, ロ воротítъ, ロシヤ語に生じたこの音変化を полногласие という。

語末音の弱化も著しい影響を及ぼした。自主的な語では語末子音は消えてしまったので, *pades ‘汝が倒れた’ も *padet ‘彼が倒れた’ も教ス pade となって区別がつかなくなってしまう。o 語幹の男性名詞の主格は *-os, 対格は *-om であったのに, とともに無に帰したので, リトアニア語では今でも ‘おかみ’ はそれぞれ vilkas, vilkaⁿ であるのに, 教ス vlikū, ロ волк の一形になってしまった。

印欧語の音素のうち非常に大きな役割をしたのは i の子音形, チェック語やポーランド語で j と表わす音である。スラヴ語ではこの音が周囲を非常に変えた。j の前では k > č, s > š, t > č (教ス št), d > ž (教ス žd) などに変ったので, 複雑な交替が生じた, 例教ス pīsatī (pisati) ‘書く’, 一人称単数 pišoⁿ (<*pisjoⁿ), ロ писáтъ, 一単 пишу, 教ス voditi ‘導く’, 一人称単数 voidoⁿ (<*vodjoⁿ), ロ водítъ, 一単 вожý など。

j は後続の母音を軟化した。例えば nesomǔ ‘運ばれる’ に対する *znajomǔ は znajemǔ ‘知られる’ となった。そこで硬軟両変化の対立が生じた。lěto ‘年’/*morjo > morje ‘海’。

印欧基語の音調は高低で, 音色にも母音の長さにも作用しなかった。スラヴ基語も大体この状態を保った, これが音韻の状態が古いままに保たれた理由の一つである。しかし強弱も現われるようになり, 各スラヴ語でいろいろになった。ポーランド語やチェック語では語の一定の位置に強アクセントが固定したが, ポーランド語では最後から2番目, チェック語では語頭の音節である。セルボクロアート語は高低アクセントをかなりよく保つ。ロシヤ語では古い音調

が著しい強さと結びつき、強アクセント音節のみがやや長く、それ以外の音節はすべて短くなおざりに発音されるようになり、音色まで変って来た。

スラヴ語が非常に保守的な音韻組織をもつように見えるのは、種々の変化が起ったにかかわらず語全体の相貌が元のままに保たれたからである。しかしスラヴ基語中で、将来各スラヴ語の発達中で顕現すべき多くの重要な傾向が生じた、それらの傾向はバルト語派には生ぜず、それがスラヴ語にバルト諸語と非常にちがう相貌を与えたのである。

*

印欧語の文では各語が文中におけるその役割を示す目印を具えていた。古代の印欧語の語を耳にすれば、それが文中でどんな役割をする語であるかすぐ分った。ラテン語 *amicus* 友は (が), *amici* 友の, *amicō* 友に, 友によって, 友から。しかるに近代の非常に進化した印欧諸語はこの古い組織を失った。文中における語の役割は位置や前置詞などで示される。この点からするとスラヴ語は最初の文献の頃はまだ印欧基語的であり、現代の諸スラヴ語も大体においてこの古いタイプに忠実である。スラヴ語とバルト語は印欧語の格変化を他に類のないほど豊かに保った。しかしよく見ると非常な改新をしているのだ。

印欧基語では名詞も動詞も単数のほか両数 (dual) をもっていた。古代のスラヴ語はこの別を保ち、今もまだ保つものがある、スロヴェニア諸方言では両数が現用されている (リトアニアの若干方言でも)。9 世紀にスラヴの翻訳者たちが両数を厳密に用いていた時、インドでもギリシャでもイタリヤでも両数はもう廃用に帰していた。そしてスラヴ語では多く新しい価値で部分的に保たれた。ロシア語における名残は 2 という数との構成である。два брата '2 人の兄弟'。しかし古い両数は単数生格と感じられ、一方男性から中・女性へひろがり (два окна '2 つの窓', две сестры '2 人の姉妹'), 他方 3, 4 へ及んだ。три брата '3 人の兄弟', четыре сестры '4 人の姉妹'。斜格では複数形が使われる。生・対 двух братьев, また一対をなす器官の名に両数形が複数として残っている。óчи '眼', úши '耳' (単は óко, úхо)。

性は印欧基語では活性 (animate) と非活性 (inanimate) があり、その別は主格と対格にのみ存した。活性のうちある接尾辞をもつものは女性、その他は男性であったが、男性・女性としての特有な変化はなかった。例えば *pater- '父' と *māter- '母' の語形変化は同じであった。そしてこれらに対して非活性は中性をなした。だから男・女・中の別は異質的だった。しかし性別は名詞自身ではなく、それにかかる形容詞や代名詞によって定まったのである。

ところがスラヴ語では男女別々の語形変化が生じ、性別が名詞自身において識別され、男・女・中の三性が等質的に同じ平面上におかれるようになった。雌雄いずれにも用いた *owis ‘羊’ を ovī-nŭ ‘雄羊’ と ovī-ca ‘雌羊’ (рoвнiа) に分けるし、*snusós ‘息子の妻’ は snusā (рoчoxá) という形に変えた。そして性別による語形変化の統合が行われ、男・中にそれぞれ1類、女性に2類の変化ができた (ロシア語では цвет, лето, жена, кость)。しかし複数では、指示代名詞の複数斜格が三性同形だったことなどから発して、各類の変化にほとんど差がなくなってしまった。

スラヴ語では男性名詞は語末音の弱化のために主格語尾 *-os, *-us も対格語尾 *-on, *-un も消えて、単数はすべて主・対格が同形になってしまった。語順の比較的自由的な国語では人を表わす名詞の場合いづれが動作者でいづれが受動者なのか不明では不便なので (複数では主格と対格は別形だったし、女性単数でも主・対は別形)、指示代名詞単数が生格でも対格でも togo という形になっていたのに倣って、生格を対格に借用するようになり、スラヴ諸語で動物へも広がり、ロシア語では複数にも及ぼし、かつ女性や中性の複数へもひろげた。ポーランド語では人／非人という区別まで追加した。こうして印欧基語にあった活性／非活性の別が部分的に再建されたわけである。

印欧基語は8格をもっていたが、スラヴ語は奪格 (ablative) 形を生格 (genitive) と奪格を合せた生格として用い (スラヴ語では生格の名詞補語よりも物主形容詞を用いることが多かったから生格形が保たれなかったのであろう)、出発点を表わした奪格の機能は前置詞で表わすようにした (昔の前置詞なしの奪格の用法の名残は ‘恐れる’ などの意味の動詞と共にする生格や比較級を使う ‘より’ という意味の生格などに残っている)。ロシア語は更に呼格 (vocative) も主格ですませるようにしたので6格になった。また場所や時を表わした位格 (locative) は、必ず前置詞をつけて意味を明確化するようになったので、前置格 (prepositive) と呼ばれるようになった。位置の指示を前置詞で正確化することは印欧語の全域で古くから行われた。一般に前置詞が豊富になったので、格変化は必ずしも必要でなく、ロシア語の外来語や略語には不変化の名詞さえ少くない。南スラヴ語では南へ行くほど格変化が減る、ブルガリヤ語は格変化を棄ててしまった。格の意味内容の空虚化、それによる格形の消失がスラヴ語の大きな傾向である。

形容詞は、原始印欧語では名詞と同形であり、ただ女性特有の語幹をも有しただけである。スラヴ基語もこの状態を保ったが、ほかに指示代名詞 je- があ

とへつて名詞・形容詞の結合を限定する長語尾形ができ、これが例えば男・中の生格単数 *novajego* > *novāgo* > *novago* のように縮約して盛んに使われるようになった。この方が特徴的であり、特徴的な方が優勢となるのが常だから、ロシア語では短語尾形は述語として使われるだけで格形を失い、形容詞の組織から脱落して衰えつつある。名詞型の変化は南スラヴ語で最もよく保たれている。こうしてロシア語は名詞とまるでちがう形の形容詞をもつようになった。スラヴ語は格や性などを豊富に保ちながら、実質的には多くの改新を経たのであって、その名詞・形容詞組織は印欧基語のそれとは非常に異って来たのである。

*

動詞を見ると、スラヴ語はバルト諸語と非常にちがう。双方において多くの古い特徴が失われ、新しいやり方が導入されたからである。

印欧語には直接法（命令法を含む）のほか、まだ心的存在以上にはなっていない過剰を表わす接続法 (subjunctive) と、実際には生じないかも知れない非現実過剰を表わす希求法 (optative) が存した。ギリシャ語は次第に希求法を失ったし、ヴェーダでよく使われた接続法は古典サンスクリット語では消えてしまった。しかしどこでも2種の法は存し、それを起原のいかんを問わず直説法および接続法と称している。そして接続法はよく副文で使われる。ところがスラヴ語は最古の文献以来直説法しかもっていない。そして昔の希求法を、あまり明瞭でなくなった命令法の代りに用いた。教ス *beri, berete* ‘取れ’ はギリシャ語の希求法に当たっている。スラヴ語は早くから情緒的な方面を表わす法を除いてしまったのであり、副文が発達しなかったこともこれを助けたであろう（今の *бы* による接続法は *byti* のアオリストの二・三人称単数形に *-lŭ* の分詞がついてできたもの）。

スラヴ語には昔の完了 (perfect) の形は伝わったが（教ス *věde* ‘我知る’）、早く衰え、その代りに、分詞形に‘ある’という動詞をつけた形（教ス *neslŭ jesmŭ*）が行われるようになった。ロシア語では後に‘ある’という動詞がとれて *нес, несла*……だけですむようになり、これが唯一の過去形となる。このやり方は紀元後4世紀のゴート語にもまだないものだが、分詞の固定した形と助動詞（ヒッタイト語では‘持つ’という動詞）で perfect, pluperfect などを表わすことは紀元前1900—1200のヒッタイト語でも行われたのであって (J. Friedrich, *Hethitisches Elementarbuch*, Heidelberg, 1940, p. 63), 近代性の証拠とはならない。しかし自主的な語であった *seⁿ* ‘自分’ という要素

で昔の中間態 (middle voice) の語尾をおきかえたのは近代的である。古代ロシア語では *ся* を動詞の前へおくことも、間へ別の語を入れることもできたが今のロシア語では動詞の末尾へ自主性を失った *-ся* がつく。

古代の印欧語では語根に直属する現在語幹・アオリスト語幹・完了語幹がそれぞれ独立していた。多くの印欧語でこれが2語幹の一動詞変化 (conjugation) に統合された。スラヴ語でも現在語幹と不定形語幹をもつ一動詞変化となり、この両語幹は大体においてほとんど同形で、一方から他方を推測し得ることが多い。かくてスラヴ語・ロシア語は動詞の一般的構造においても近代的なものになった。

スラヴ語の動詞にはアスペクト (aspect, вид, 相) の別があり、ロシア語文法で不完了体・完了体と訳される一対が一動詞をなすのが普通である。

スラヴ語のアスペクトの起原については種々の説があるが、印欧語の最古の状態を示唆するところの多いヒッタイト語には、直説法と命令法の2法、現在・未来と過去の2時称があり、語形変化に2種あるが、意味はちがわない。その一は歴史的に印欧語の現在およびアオリスト組織に当るが、特にアオリストに当るものはない。他は perfect に当るが他の印欧語の現在およびアオリスト組織に当る形からも影響を受けている (E. Sturtevant and E. Hahn, *A Comparative Grammar of the Hittite Language*, 1951, p. 118 ff.). 従って、現在語幹とアオリスト語幹の別が印欧語全体にギリシャ語におけるように明瞭に存したとは考えられず、印欧基語における現在・アオリストの対立にギリシャ語におけるような重要性を与えんとするのは誤まりであろう。ギリシャ語やインドイラン語に見られる動詞組織はこれらの語派のみにおける平行的発達と考うべきである (J. Gonda, *The Aspectual Function of the Vedic Present and Aorist*, 1962, p. 261 ff.). スラヴ語の不完了体・完了体の対立は、ギリシャ語の現在語幹とアオリスト語幹の対立に用法上よく似ている。しかし形態上の類似はない。ギリシャ語では動詞の各語幹がアスペクトを異にするのに、スラヴ語では数個の語幹を具えた独立の動詞がアスペクトの対をなす。スラヴ語ではアオリストも不完了時 (imperfect) も、完了体からも不完了体からも作り得るが、これはギリシャ語では考えられないことである。それに上述のように、印欧基語で現在とアオリストがどの程度に分化していたのか疑わしい。

スラヴ語のアスペクトは接頭辞が原動力となって発達したのであろう。ゴート語では *ga-* が限定的な意味を与え、*ga-* のつく動詞は未来を表わすのに使われた。しかしゲルマン語全体でこのやり方が一般化したわけではないし、アス

ペクトはこの段階以上には発達せずに亡んでしまった。

バルト語派のリトアニア語では、基本動詞と並び *pa-* などのつく形があり、別の意味を加えずに完了を表わし、現にやりつつある動作は表わせない。他のバルト語もほぼ同様である。しかし完了動詞に対応する不完了動詞は原動詞であり、スラヴ語のように派生不完了体を発達させなかった (L. Dambriūnas, *Verbal Aspects in Lithuanian*, 1959, p. 253-262; Chr. S. Stang, *Vergleichende Grammatik der baltischen Sprachen*, 1966, p. 359 ff.)。

バルト語やスラヴ語は **-sy-* による未来をもっていた、バルト語はこの未来を今ももつのに、スラヴ語は痕跡をとどめるだけでこれを失った。s アオリストが発達したので、これと形が近すぎる **-sy-* 未来を排除するほうが好都合だったからでもある。そこで接頭辞のついた動詞は基本動詞に対して現在未来の意味を取り、**-sy-* 未来に代った。印欧基語の接続法は語幹のみによって特徴づけられていたので、語幹母音のある現在形は語幹母音のない語根的現在の接続法のような形をしていた。だからこれに接頭辞のついた形が未来を表わし易かったのだろう (A. Meillet, *Les valeurs du présent slave*, RÉS, XII, 1932, fasc. 3-4, p. 157-9)。そしてスラヴ語は、未来を再建するとともに *-iti*, *-ati* の‘反復’動詞による不完了体を得て、アスペクト組織を作り上げた。この *-ā-* などの接尾辞は例えばラテン語にもあり、やはり持続的の意味の動詞を作るのに用いられる。oc-cipere ‘始める’に対する oc-cupāre ‘占める’。だからスラヴ語のアスペクトを表わす用具は印欧語起原である。スラヴ語の改新は、古い素材を新しい形態的組織へはめこんで、独特のアスペクト組織を作り上げた点にある。バルト語は **-sy-* の未来をもっていたので、これを補うアスペクト組織を必要としなかった。ロシア語ではアスペクト組織をますます整備し、他にも時称や法を補う種々の表現法を発達させて、アスペクト・時称・法が解き難い一体をなす柔軟で豊かな動詞組織を作り上げた。*-и* 以外の種々の過去は不用となり亡び去った。

メイエは‘スラヴ語は概して印欧語の精神に忠実なままである。その動詞組織の全体を支配するのは時称のような抽象的なカテゴリーではない、それは比較的具体的なアスペクトのカテゴリーである。形態上からすればスラヴ動詞はホメーロスのギリシャ語とは非常に遠い、しかし意味からすれば非常に近い’といっているが (A. Meillet, *Des innovations du verbe slave*, RÉS, fasc. 1-2, p. 45), 印欧基語のアスペクト状態が不詳となった今では、そう言えるかどうか疑わしいようである。